



# 第 1 日

## 国 語

(9 : 30 ~ 10 : 20)

### 注 意

- 1 検査開始のチャイムがなるまで開いてはいけません。
- 2 問題用紙の1ページから13ページに、問題が一から四まであります。  
これとは別に解答用紙が1枚あります。
- 3 問題用紙と解答用紙に受検番号を書きなさい。
- 4 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

受検番号	第	番
------	---	---

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

吉をどのような人間に仕立てるかということについて、吉の家では晩餐後毎夜のように論議せられた。またその話が始まった。吉は牛にやる雑炊を煮ながら、ひとり柴の切れ目からぶくぶく出る泡を面白そうに眺めていた。「やはり吉を大阪へやる方が好い。十五年も辛抱したなら、暖簾が分けてもらえるし、そうすりゃあそこから直ぐに金も儲かるし。」そう父が言うのに母はこう言った。「大阪は水が悪いというから駄目駄目。幾らお金を儲けても、早く死んだら何もならない。」「百姓させば好い、百姓を。」と兄は言った。「吉は手工が甲だから信楽へお茶碗造りにやるといいのよ。あの職人さんほどいいお金儲けをする人はないって言うし。」そう口を入れたのはませた姉である。「そうだ、それも好いな。」と父は言った。母だけはいつまでも黙っていた。

その夜である。吉は真つ暗な果てしのない野の中で、口が耳まで裂けた大きな顔に笑われた。その顔は何処か正月に見た獅子舞いの獅子の顔に似ているところもあつたが、吉を見て笑う時の頬の肉や殊に鼻のふくらぎまでが、人間のようによく動く動いていた。吉は必死に逃げようとするのに足がどちらへでも折れ曲がって、ただ汗が流れるばかりでケッキョク身体はもとの道の上から動いていなかった。けれどもその大きな顔は、だんだん吉の方へ近よって来るのは来るが、さて吉をどうしようともせず、何時までもたつてもただにやりにやりと笑っていた。何を笑っているのか吉にも分からなかった。が、とにかく彼を馬鹿にしたような笑顔であつた。

ひと月もたつと四月が来て、吉は学校を卒業した。しかし、少し顔色の青くなつた彼は、まだ剃刀を研いでは屋根裏へ通い続けた。そしてその間も時々家の者らは晩飯の後の話のついでに吉の職業を選び合った。が、話は一向にまとまらなかつた。ある日、昼餉を終えると父は顎を撫でながら剃刀を取り出した。吉は湯を飲んで「誰だ、この剃刀をぼろぼろにしたのは。」父は剃刀の刃をすかして見てから、紙の端を二つに折って切ってみた。が、少し引つかかした。父の顔は険しくなつた。吉は飲みかけた湯を暫く口へ溜めて黙っていた。「吉がこの間研いでいましたよ。」と姉は言った。「吉、お前どうした。」やはり吉は黙って湯をごくりと咽喉へ落とし込んだ。「うむ、どうした？」吉が何時までも黙っていると、「ははア分かつた。吉は屋根裏へばかり上つていたから、何かしていたに決まつてる。」と姉は言つて庭へ降りた。「いやだ。」と吉は鋭く叫んだ。「いよいよ怪しい。」姉は梁の端に吊り下がっている梯子を昇りかけた。すると吉は裸足のまま庭へ飛び降りて梯子を下から揺すぶり出した。「恐いよう、これ、吉つてば。」肩をチヂメている姉はちよつと黙ると、口をとがらせて唾を吐きかける真似をした。「吉ッ！」と父は叱つた。暫くして屋根裏の奥の方で、「まアこんなところに仮面が作えてあるわ。」という姉の声がした。吉は姉が仮面を持って降りて来るのを待ち構えていて飛びかかった。姉は吉を突き除けて素早く仮面を父に渡した。父はそれを高く捧げるようにして暫く黙って眺めていたが、「こりゃ好く出来とるな。」またちよつと黙って、「うむ、こりゃ好く出来とる。」と言つてから頭を左へ傾け変えた。仮面は父を見下して馬鹿にしたような顔でにやりと笑っていた。その夜、

翌朝、蒲団の上に座つて薄暗い壁を見詰めていた吉は、昨夜夢の中で逃げようとしてもがいたときの汗を、まだかいていた。その日、吉は学校で三度教師に叱られた。最初は算術の時間で、仮分数を帯分数に直した分子の数を聞かれた時に黙っていると、「それ見よ。お前はさつきから窓ばかり眺めていたのだ。」と教師に睨まれた。二度目の時は習字の時間である。その時の吉の草紙の上には、字が一字も見あたらないで、宮の前の高麗狗の顔にも似ていれば、また人間の顔にも似つかわしい三つの顔が書いてあつた。そのどの顔も、笑いを浮かばせようと骨折つた大きな口の曲線が、幾度も書き直されてあるために、真つ黒くなつていた。三度目の時は学校の退けるときで、皆の学童が包を仕上げて礼をしてから出ようとすると、教師は吉を呼び止めた。そして、もう一度礼をし直せと叱つた。

家へ走り帰ると直ぐ吉は、鏡台の引き出しから油紙に包んだ剃刀を取り出して人目につかない小屋の中でそれを研いだ。研ぎ終わると軒へ回つて、積み上げてある割木を眺めていた。それからまた庭へ入つて、餅搗き用の杵を撫でてみた。が、またぶらぶら流し元まで戻つて来るとまな板を裏返してみたが急に彼は井戸傍の跳ね釣瓶の下へ駆け出した。「これはうまいぞ、うまいぞ。」そう言いながら吉は釣瓶の尻の重りに縛り付けられた櫛の丸太を取りはずして、その代わりに石を縛り付けた。暫くして吉は、その丸太を三、四寸もアツみのある幅広い長方形のものにしてから、それと一緒に鉛筆と剃刀とを持って屋根裏へ昇つていった。次の日もまたその次の日も、そしてそれからずつと吉は毎日同じことをした。

納戸で父と母とは寝ながら相談をした。「吉を下駄屋にさそう。」最初にそう父が言い出した。母はただ黙つてきいていた。「道路に向いた小屋の壁をとつて、そこで店を出さそう、それに村には下駄屋が一軒もないし。」ここまで父が言うと、今まで心配そうに黙っていた母は、「それが好い。あの子は身体が弱いから遠くへやりたくない。」と言つた。間もなく吉は下駄屋になつた。吉の作つた仮面は、その後、彼の店の鴨居の上で絶えず笑っていた。無論何を笑っているのか誰も知らなかつた。吉は二十五年仮面の下で下駄をいじり続けて貧乏した。無論、父も母も亡くなつていた。ある日、吉は久しぶりでその仮面を仰いで見た。すると仮面は、鴨居の上から馬鹿にしたような顔をしてにやりと笑つた。吉は腹が立つた。次には悲しくなつた。が、また腹が立つて来た。「貴様のお蔭で俺は下駄屋になつたのだ！」吉は仮面を引きずり降ろすと、鉦を振るつてその場で仮面を二つに割つた。暫くして、彼は持ち馴れた下駄の台木を眺めるように、割れた仮面を手にとつて眺めていた。が、ふと何だかそれで立派な下駄が出来そうな気がして来た。すると間もなく、吉の顔はまたものように満足そうにぼんやりと和らぎだした。

(横光利一「笑われた子」による。)

(注1) 暖簾を分ける 〓 長年よく勤めた店員などに新しく店を出させ、同じ店名を名乗ることを許す。

(注2) 手工が甲 〓 凶画工作の成績が良いこと。

(注3) 信楽 〓 滋賀県の地名。信楽焼しからぎやまという陶器の産地。

(注4) 高麗狗 〓 神社の社殿の前に置いてある獅子に似た獣の像。

(注5) 跳ね釣瓶 〓 竿さおの先につけた桶おけを石などの重みで跳ね上げ、井戸の水を汲むようにしたもの。

(注6) 昼餉 〓 昼食。

(注7) 梁 〓 屋根の重みを支えるために柱の上部に架け渡した材木。

(注8) 鴨居 〓 ふすまや障子などをはめ込むために、部屋と部屋の間や出入り口の上部に渡した溝のある横木。

1 ①②③のカタカナに当たる漢字を書きなさい。

2 1 笑いを浮かばせようと骨折った大きな口の曲線が、幾度も書き直されてあるとあるが、次の文は、吉がこのような行動をとった理由について述べたものです。空欄Ⅰに当てはまる適切な表現を、十字以内で書きなさい。

吉は、習字の時間も（Ⅰ）のことが気になっていたので。

5 ㉔から㉖までの部分について、国語の時間に、生徒が話し合いました。次の【生徒の会話】はそのときのもので、これを読んで、あとの(1)・(2)に答えなさい。

【生徒の会話】

大野… 吉はある日、久しぶりに仮面を見たら、腹が立ってきて仮面を引きずり降ろして割ったのよね。でも、その後、吉が割れた仮面で立派な下駄が出来そうな気がして、もとのように満足そうに表情が和らいでいるのはなぜなのかな。

長野… 確か、吉が引きずり降ろして割った仮面は、吉を下駄屋にするという父の決断の大きなきっかけになっていたよね。

小川… なるほど。だから吉は、「貴様のお蔭で俺は下駄屋になったのだ！」と言っているんだね。ということは、仮面は吉の（Ⅱ）を象徴していると考えられない？ 吉は自分が下駄屋として生きてきたことに不満があるのかなあ。

大野… 吉は二十五年間、下駄屋を続けてきたんだね。でも、ある日、久しぶりに鴨居の上の仮面を見たら、二十五年間、下駄屋を続けてきた自分の人生を、仮面が馬鹿にして笑ったように感じたんだよね。だから、腹が立って、悲しくなって、また腹が立って仮面を引きずり降ろして割ったのだと思うよ。

長野… でも、吉は腹を立てて仮面を割ったけれど、本文の最後では、またものように満足そうにぼんやりと表情が和らいでいるよ。腹を立てていたのに、どうして最後に表情が満足そうにぼんやりと和らいだのかなあ。

3 2 ずっと吉は毎日同じことをしたとあるが、吉は毎日どこで何をしていたのですか。十五字以内で書きなさい。

4 文章中で、母はどのような母親として描かれていると考えられますか。本文の内容を根拠に挙げ、「……ところや、……ところから、……母親として描かれていると考えられる。」という形式によって、あなたの考えを書きなさい。

小川… 腹を立てて仮面を割った後、暫くして、持ち馴れた下駄の台木を眺めるように、割れた仮面を手にとって眺めて、ふと何だかそれで立派な下駄が出来そうだと感じているよね。吉は強く意識しているわけではないかもしれないけれど、この吉の行動は、吉が（Ⅲ）（Ⅳ）ということの表れだと思えるなあ。だから、腹が立っていたけれど、暫くすると、もとのように満足そうに表情が和らいだんじゃないかな。

大野… そうだね。「ぼんやりと和らぎだした」という表現に、吉の性格も表れているなあと思ったよ。

(1) 空欄Ⅱに当てはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 秘められた本心
- イ 家族との別離
- ウ 定められた運命
- エ 報われない努力

(2) 空欄Ⅲに当てはまる適切な表現を「……ことで、……になっている」という形式によって書きなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

世界中にある絵画の中で、もしも一枚だけ好きな絵をもらえらるとしたら、どのアーティストの作品が欲しい？

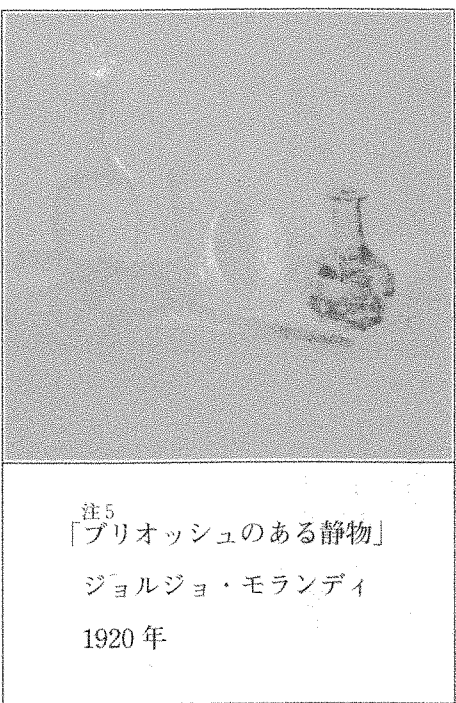
アート関係者が集まった酒宴の席で、そんな質問が飛び出した。私は、さっそく自分にとっての「この一枚」は誰の作品だろうか、と思索した。どんなアーティストを選ぶかによって、その人の個性も垣間見える。これは心して選ばねばなるまい。ピカソもいいし、マティスも捨てがたい、はたまたセザンヌも……などと迷っていたら、現代アートを専門にしているキュレーターの友人が、意外な画家の名を挙げた。それは、ジョルジョ・モランディであった。

「瞬にして、その場の空気がさつと変わった。全員、一様に、その手があったか！ という表情を見せた。ピカソやマティスを思い描いていた私も、「ああ、モランディ！」と思わず膝を打った。そして、誰もが口々に「いやあ、モランディはいいよね」「ほんとうにいい」と言い合ったのである。

このエピソードは、ジョルジョ・モランディを巡る象徴的なふたつのことを物語っている。ひとつは、モランディという画家が、ぱつと真つ先に思い出されたり、とかく参照されたりということがあまりない画家、つまり、ピカソやマティスやセザンヌなどは異なり、いたって地味な画家であるということ。もうひとつは、誰もが「ものすごく好き」というのではないけれど「憎からず」思っている画家なのだということ。つまり、誰にも「あの画家はいい」といわしめる普遍的な「何か」を、

るで冬眠しているかのように、静かに呼吸をし、明日へと命をつなごうとするひたむきな意志がある。その凍ったような情熱が、しんしんと観る側に伝わってくる。

テート・モダンの「モランディ展」の入り口で、この画家に惹かれたつともその力量に対しては懐疑的だった私だが、出口にたどりつく頃には、ほのかに満足していた。満腹感はない。けれど、八分目でじゅうぶんだ。滋味溢れるスローフードを食べたような、おだやかな満足感。ピカソやマティスやセザンヌにはない、不思議な満足感が、モランディの絵にはあるのだと知った。



注5 「プリオッシュのある静物」  
ジョルジョ・モランディ  
1920年

(原田マハ 「いちまいの絵」による。)

モランディは持ち合わせている——といえるのではないか。事実、私の周辺には、<sup>2</sup>公言こそしないが、「実はモランディが好きである」という隠れファンがけっこういる。私自身、モランディに対しては、いわくいいがたい魅力を感じているひとりなのである。

私が初めてまとまったかたちでモランディの作品を観たのは、かれこれ十年近くまえのことだろうか。ロンドンを訪問している最中に、<sup>注2</sup>テート・モダンで、偶然、回顧展を開催していたのだ。

モランディはもちろん知っていたし、地味ながらいい仕事をしていることも、なんとなく心惹かれる画家であることもわかっていた。その作品が一堂に集められた展示室で、私はすっかり我を忘れてモランディの世界に入り込み、<sup>注3</sup>没頭したのだった。

モランディの作品の多くは、さほどサイズが大きくなく、こぢんまりとしている。かつ、描かれているのは、なんの変哲もない瓶や水差しや花瓶などだ。それらの同じようなモチーフが、繰り返し繰り返し、作品の中に登場する。<sup>注4</sup>背景が変わったり、視点が変わったりすることもなく、ただただ、<sup>注5</sup>坦々と、同じようなものを、固定された視点で、ひたすらに、ひたむきに描いているのだ。

なんなんだこれは？ と初めて見た人は思うかもしれない。全部同じ静物画じゃないか、何がおもしろいんだ？ と。正直に告白すると、私も最初はそう思わなくはなかった。

なぜそうまでして、同じものばかりを描き続けたのか。その冷めた情熱はいつたどこからきているのか。そう、モランディの描く絵には、不思議と情熱が感じられるのだ。ただし、その温度が<sup>注6</sup>極めて低い。ま

(注1) キュレーター || 博物館や美術館で作品収集や企画立案を行う専門職員。  
(注2) テート・モダン || ロンドンにある国立近現代美術館。  
(注3) モチーフ || 創作の動機となる主要な題材・思想。モチーフ。  
(注4) スローフード || 質の良い食材で、時間をかけて作った料理。  
(注5) プリオッシュ || パンの一種。

1 ①③の漢字の読みを書きなさい。

2 一瞬にして、その場の空気がさつと変わったとあるが、筆者が、そのように感じたのはなぜですか。その理由について述べた次の文の空欄Iに当てはまる適切な表現を、四十五字以内で書きなさい。

筆者の友人が答えた「ジョルジョ・モランディ」という画家は、( ) I ( ) 画家であるため、酒宴に参加した人たちが、全員、一様に、その手があったか！ という表情を見せたから。



三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

そもそも正月七日に、野に出でて、七草を摘みて、みかどへ供御に供

ふるといふなる由来を尋ぬるに、唐土楚国の傍らに、大しうといふ者あり。かれは

なり。すでに、はや百歳に及ぶ父母あり、腰などもかみ、目などもかすみ、言ふことも聞こえず。さるほどに、老いければ、大しうこの朽ちはたたる御姿を見参らする度に、嘆き悲しむこと限りなし。

大しう思ふやうは、二人の親の御姿をふたたび若くなさまほしく思ひて、明け暮れ天道に祈りけるは、「わが親の御姿、ふたたび若くなして

「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」

「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」

「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」

「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」

「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」

「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」  
「わが親の御姿、ふたたび若くなして」

1 [ ] に当てはまる最も適切な表現を、次のア～エの中から選び、その記号を書きなさい。

- ア 親に孝ある者
イ 子に頼る者
ウ 親を欺く者
エ 子を案ずる者

2 嘆き悲しむこと限りなしとあるが、大しうは何を嘆き悲しんでいるのですか。現代の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

3 訴への平仮名の部分を、現代仮名遣いで書きなさい。

4 この文章について、生徒が次のような話し合いをしました。空欄Iに当てはまる最も適切な表現を、あとのア～エの中から選び、その記号を書きなさい。また、空欄IIに当てはまる適切な表現を、現代の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

山田… 大しうの両親はこの後どうなったのかなあ。この文章の続きが気になるなあ。
大谷… 僕もそのことが気になって「御伽草子集」を図書館で借りて続きを現代語訳で読んでみたよ。すると、こんな話だったよ。

爪先を爪立てて、肝胆を砕き祈りける。さても、諸天諸仏は、これを

あはれみ給ひ、三七日満ずる暮れ方に、かたじけなくも帝釈天王は天

降り給ひ、大しうに向かつてのたまふやうは、「なんぢ、浅からず親

をあはれみ、ひとへに天道に訴ゆること、納受を垂れ給ふによつて、

われ、これまで来るなり。いでいで、なんぢが親を若くなさん」とて、

薬を与へ給ふぞありがたき。

薬の作り方を伝授して、下さつたのは

(注1) 供御 天皇の飲食物。
(注2) 大しう 人の名前。
(注3) 三宝 仏教で信仰の対象となる、仏・法・僧の三つ。
(注4) 三七日が間 仏に祈願をする二十一日間。
(注5) 帝釈天王 仏法を守護する神。

【大谷さんが読んだ続きの要約】

大しうは、帝釈天王から伝授された通りに、七種類の野草で薬を作り、両親に与えた。すると、両親は二十歳くらいの姿になり、大しうは大変に喜んだ。七草という七種類の野草を正月七日にみかどに差し上げるのは、この出来事がきっかけであるとされている。

山田… 大しうの願いがかなっているね。大しうが( I )から願いがかなったんだね。
田中… この出来事が、みかどに七種類の野草を差し上げるきっかけになったんだね。七種類の野草を差し上げることで、みかどに( II )という気持ちを伝えるためなのだろうね。
山田… そうだね。そしてこのことが、現在、僕たちが一月七日に「七草がゆ」を食べる行事とも関係しているのかもしれないね。調べてみようよ。

- ア 中国の楚の国に何度も行った
イ 神仏に熱心に祈り続けた
ウ 自分の病を治すために薬を作った
エ 努力して健康を保ち続けた

四 小島さんの学級では、国語の時間に、それぞれが書いた作文の題名についてアドバイスをし合う活動をしています。次の【メモ】は、中井さんが作文を書くときに準備したもので、【作文】は中井さんがメモを基に書いた作文です。また、【生徒の会話】はこの活動の過程で小島さんと中井さんが行ったものです。これらを読んで、あとの【問い】に答えなさい。

【メモ】

作文のテーマ 自分の尊敬する人物を例に挙げて、自分の目指す生き方を相手に伝える

自分の目標 自然科学の研究をして、発明家になる

例に挙げる、尊敬する人 エジソン

エジソンは、幼いころから身のまわりの様々なことに「なぜ？」という疑問を持っていた。小学校の授業でも、自分が「なぜ？」と感じたことはすぐに追究しないと気が済まないため、授業内容に関係のない、見当違いな発言や行動が目立ち、小学校を三か月で退学になってしまった。しかし、エジソンは図書館などで独学し、「なぜ？」と感じたことを追究し続けた。さらに、新聞の販売員として働いて得たお金で、自分の実験室を作り、様々な物を発明した。生涯、学び続ける姿勢を大切に、最終的には、アメリカで千九百十三件もの発明に関する特許を得た。

【作文】

私の夢

中井 良子

私は理科の授業が好きだ。特に、実験をした後に考察し、「なぜ？」と想っていた疑問を追究することは本当に楽しい。だから、将来は大学で自然科学に関する研究をし、エジソンのように生活に役立つものを発明したいという夢を持っている。

エジソンは白熱電球や蓄音機などを発明した。私は、エジソンについて書かれた本に出会うまで、エジソンは発明家になるために大学でいろいろな研究をし、研究の中でひらめいたことを基に発明に至った人物だと思っていた。

しかし、エジソンに関する本を読み、エジソンは大学での研究の中で発明に至ったわけではないと分かった。エジソンがたくさんのものを発明できたのは、「なぜ水をかけると火は消えるのか」「なぜチョウは飛べるのか」というような、私が「当たり前だ」と思っていることを、小学生の頃から疑問に感じ、疑問に感じたことを自分の実験室でとことん研究していたからだ。日常の中で自分から疑問を持ち、追究し続ける姿勢に感動した。

私が日々の学習で、疑問を見いだし追究することを楽しいと感じているところは、エジソンと共通していると思う。だから、発明家になるという目標に向かって、これからも「なぜ？」と感じたことを、途中であきらめず、追究する姿勢を大切にしたい。

【生徒の会話】

中井… 小島さん、私の書いた作文を読んでみてどうだった？ 題名は適切だったかなあ。

小島… そうねえ……。私は、題名をもっと工夫したらいいんじゃないかと思つたわ。授業で、自分が一番伝えたいことの中から中心となる言葉を考えて題名やタイトルを付けるとよいと学習したよね。だから、中井さんの伝えたいことがもっと明確に伝わるような題名がいいんじゃないかな。今、話したことと、中井さんの作文を基にアドバイスを書いてみるわね。

【問い】

小島さんは、中井さんが書いた作文の題名についてのアドバイスを書いて伝えることにしました。あなたならどのように書きますか。次の条件1～3に従って、あなたの考えを書きなさい。

条件1 二段落構成とし、第一段落は、題名の案を挙げて書き、第二

段落には、その題名がよいと考えた理由を書くこと。

条件2 【作文】と【生徒の会話】の内容を踏まえて書くこと。

条件3 二百字以内で書くこと。

